

JAIR Newsletter

日本国際政治学会ニュースレター

No. 92 March 2001

理事長就任に当たって

猪口 孝 (東京大学)

学会とは学術的なプロフェッショナリズムの持ち主が集い、真理追求のために協力と競争を行う組織である。互助会や同好会のようにもあれば、切磋琢磨の場でもある。会員が1958名(2001年1月現在)の学会で、年研究大会1回、学術誌(日本語)年3冊、学術誌(英語)年2冊、ニュースレター年4回、それに多くの分科会活動が行われている堂々とした学会である。

現在学会が優先順位をあたえなければならないのは次の三点ではないだろうか。第一、参加拡充、第二、財源確保、第三、広報強化である。第一の参加拡充は会員の希望をよりよく満たすためにも、発表機会の増大と報告の質の向上が必要である。とりわけ今年から刊行される英文誌 *International Relations of the Asia-Pacific* はアジア・太平洋地域の国際関係に焦点を当てながらも、国際政治理論や外交史や地域研究などを広範にカバーし、学術的な討論のための地球的なフォーラムとして、一流の執筆者、一流の論文を掲載するべく、鋭意工夫と努力を重ねている。すでに第1巻、第1号は刊行され、Charlotte Ku/Harold Jacobson, Kalevi Holsti, Joseph S. Nye, Samuel Huntington, Robert Cox, Friedrich Kratochwil, 川崎剛などの論文を掲載している。第1巻、第2号は「組織的偽善としてのウェストファリア体制とその変容」のテーマで、Stephen Krasner, Steve Smith, Raimo Vayrynen, Mehdi Mozaffari, Baogang He, Meredith Woo-Cumings と河野勝らの論文を掲載する予定である。会員の参加が次第に増加することを切に望みたい。英語面で手助けを必要とする方もとにかく論文原稿をお送りください。日本語の学術誌もいうまでもなく非常に活発な雑誌である。最近では応募者が非常に多くなっている。おそらく編集についての今までの仕組みを再検討する必要があるのではないか。研究大会報告も報告希望者が増大するなかで、プログラムの作り方にも機会の増大と質の向上という視点か

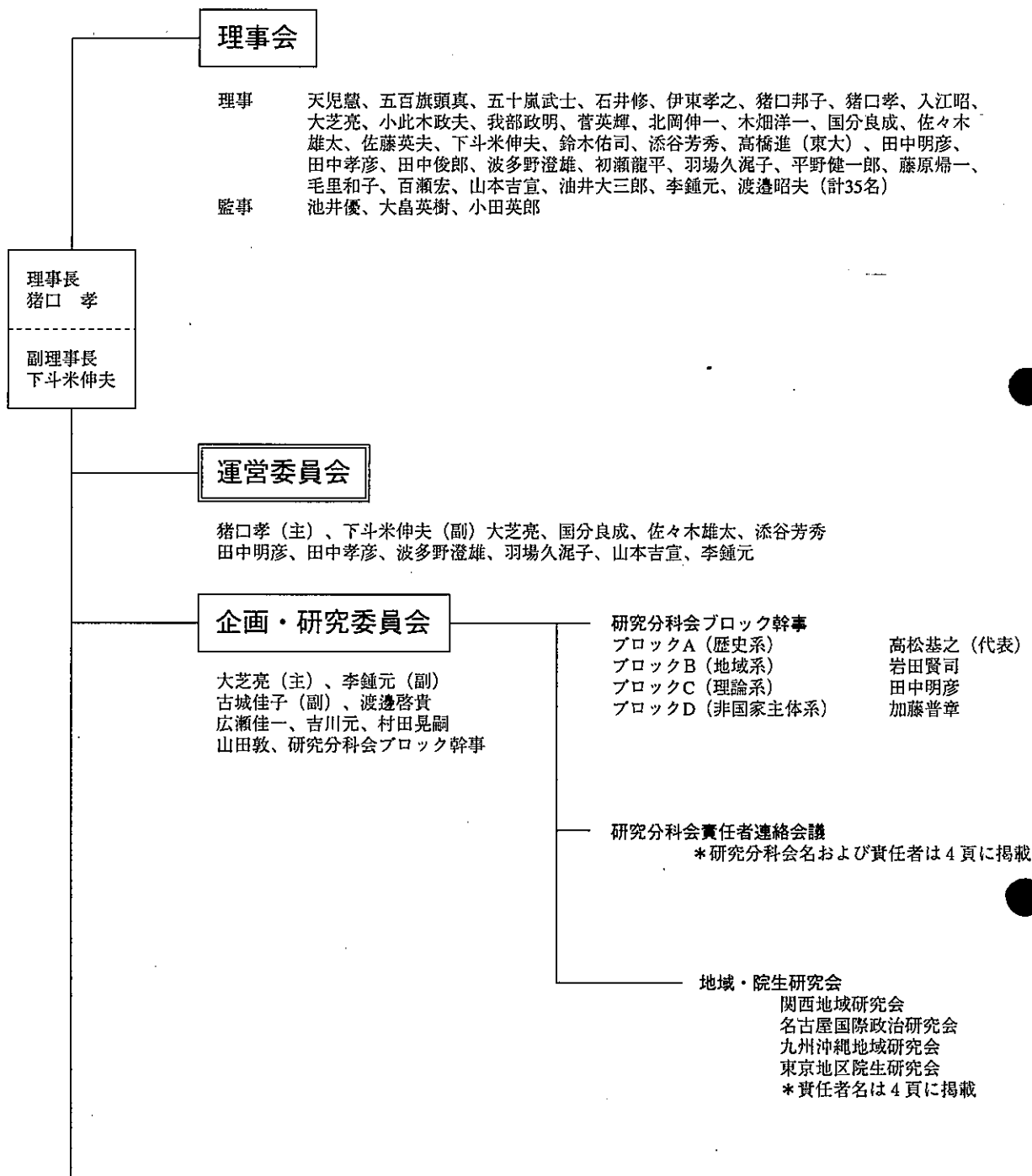
ら、工夫がもっと必要になると思われる。

第二の財源拡充は、人口が減少し、経済が減退し、大学が縮小し、会員がゆるやかな停滞をこれから記録していくとしたら、優先順位をかなり高くしなければならぬ。学会の活動量自体は飛躍的に増大しているが、会費は据え置きである。雑誌だけで年5冊も刊行し、1万円であげるには相当の工夫をこれからは必要とする。会員を増加させるのか、法人会員獲得を試みるのか、あるいは文部省や学術振興会あるいは財団からの研究刊行費をもっと獲得するように努力すべきか、あるいは会費増額をも考えたらよいのだろうか。学会事務は会員自身とりわけ運営委員がほとんど行うようになっているが、事務量は増大の一途を辿っており、事務局に大きく通常事務を任せざる仕組みが編み出せないといほんとうにもうじきに困ってくると思う。

第三の広報強化は情報革命といわれている時に、非常に立ち遅れが目立つところである。幸い、事務局長の田中明彦教授を中心に広報連絡のためのシステムを拵えてもらう方向で進んでいる。ちょっとした連絡でも郵便代は非常に高くつく。イーメール・アドレスをほとんど全員の確保できないまま、全員への連絡がひどく手間と金の懸かるものになってしまっている。経費節減だけでなく、広報強化のためにホームページは不可欠である。研究大会報告論文の掲載、大会報告のための応募などのほかに、学会誌論文掲載や討論黒板なども設けたいと思うかもしれない。

これらの事柄やその他についてはいずれ運営委員会や理事会でさらに議論されるだろうと思う。そのうちいくつかは計画実現の方向に向かうだろう。私が希望することは長い光栄ある歴史をもつ本学会がさらに前進し、日本にも国際政治の主要な思潮あり、傑出した研究ありというような考えが世界にも広がることを祈って、就任のご挨拶といたします。

学会運営組織図



編集委員会

国分良成（主）
藤原婦一（副）
竹田いさみ（副）
各号編集責任者
研究分科会ブロック幹事

書評小委員会

竹田いさみ（主）、阿部純一、飯田敬輔
岩間陽子、遠藤 貢、坂元一哉、滝田賢治
竹中千春、六鹿茂夫、山本信人

英文ジャーナル編集委員会

添谷芳秀（主）、猪口孝、恒川恵市
Paul Bacon, Edward Newman, 田中明彦

ニューズレター委員会

佐々木雄太（主）、山本和也（副）
井上裕司、三須拓也

対外交流委員会

英文ニューズレター小委員会 — 田中孝彦（主）

下斗米伸夫（主）、田中孝彦、木宮正史
太田宏、稲田十一、都丸潤子、遠藤誠治

国際学術交流委員会

波多野澄雄（主）、浦部浩之、Henry Frei

会計部

（法政大学事務局）

羽場久滉子（主）、鈴木佑司（副）

事務局

東京大学事務局

田中明彦（主）
原田至郎（副）、山本和也（副）

一橋大学事務局

高松佳代子

《研究分科会責任者連絡先 (2001年2月現在)》

代表幹事：高松基之

◆ブロック A (歴史系)

①日本外交史 (波多野澄雄)

②東アジア国際政治史 (滝口太郎)

③欧州国際政治史・欧州研究 (植田隆子)

④アメリカ政治外交 (高松基之/ブロック A 幹事)

◆ブロック B (地域系)

①ロシア・東欧 (岩田賢司/ブロック B 幹事)

②東アジア (添谷芳秀)

③東南アジア (田村慶子)

④中東 (酒井啓子)

⑤ラテンアメリカ (二村久則)

⑥アフリカ (小田英郎)

◆ブロック C (理論系)

①理論と方法 (田中明彦/ブロック C 幹事)

②国際統合 (福田耕治)

③安全保障 (土山實男)

④国際政治経済 (山田高敬)

⑤政策決定 (長尾 悟)

◆ブロック D (非国家主体系)

①国際交流 (阿部汎克)

②トランスナショナル (加藤普章/ブロック D 幹事)

③国連研究 (内田孟男)
(事務連絡先：山田哲也)

④平和研究 (酒井由美子)

◆地域研究会

①関西地域研究会 (豊下楯彦)

②名古屋国際政治研究会 (定形 衛)

③九州沖縄地域研究会 (藪野祐三)

◆院生研究会

東京地区院生研究会 (野崎孝弘)

東洋文化研究所

100-6011 東京都千代田区新大塚 2-2-5 新大塚ビル 11階

e.jp

2001 年度研究大会のおしらせ

本年度の研究大会は前々回と同じく木更津「かずさアカデミアホール」で5月18日から20日にかけて行なわれます。多くの会員がすでに足を運ばれているところですが、先日大会副実行委員長の広瀬佳一会員(防衛大学)と会場周辺の事情に詳しい実行委員佐伯康子会員(清和大学)とともに下見に行き、改めてその設備の充実ぶりと環境のよさを確認いたしました。(原田至郎会員(東京大学)にも副実行委員長としてお手伝いいただいています。)先方のパンフレットには「あふれる自然が次代の英知を築きます」と書かれています。21世紀に突入した今日、この「次代」はすでにもう眼前の現実でもあります。企画委員会の御苦労で21世紀最初の大会に相応しく、新しい世紀の現実と次代を展望する充実したプログラムが作成されております。会員の皆様の御協力を仰ぎながら大会を是非とも成功に導いていきたいと思っております。一人でも多くの会員の方々の出席を心から御願ひする次第です。(大会実行委員長 渡邊啓貴)

《2001 年度研究大会の企画概要》

昨秋に前企画・研究委員会より引き継ぎを行い、会員のみなさまからのアンケートをもとに、昨年末、2001 年度研究大会企画を検討いたしました。その結果、2001 年度の共通論題でも、2000 年度同様、パネル・ディスカッション方式で自由な議論を展開してもらうことにしました。共通論題のテーマとパネリストは以下のとおりです。

共通論題「21 世紀東アジアの外交と安全保障」

5月19日(土)

- | | |
|--------------------|-------------|
| 1. 朝鮮半島の緊張緩和 | 小此木政夫(慶応大学) |
| 2. 中台関係の展望 | 天児慧(青山学院大学) |
| 3. 日米韓関係の現状と今後 | 李鍾元(立教大学) |
| 4. 東アジアの地域的枠組みの可能性 | 白石隆(京都大学) |
| コーディネーター | 藤原帰一(東京大学) |

部 会

部会についてもテーマ、報告者、討論者、司会者が決まりました。部会テーマは以下のとおりです。なお、部会報告者については全員ペーパー執筆の義務があります。

5月18日(金)

1. 冷戦史の再検討
2. 国際関係における NGO の役割
3. EU 統合の新たな模索
4. 自由論題

5月19日(土)

1. サンフランシスコ講和条約・日米安保条約 50 年
2. WTO が国際政治に与える影響
3. 冷戦後の大量破壊兵器問題
4. 国際社会と国際制度

5月20日(日)

1. 転換期のアメリカ
2. IT 時代の市場と国家
3. ロシアと隣接する欧州の安全保障
4. 人間の安全保障

なお、ご意見などございましたら、企画・研究委員までお寄せください。

(企画・研究委員会主任 大芝 亮)

《ユーラシア紛争調査プロジェクト

第三回「秋野豊賞」募集要項

対象 ユーラシア大陸の地域紛争の現場に赴き、その地で調査研究活動を行ったり、NGO などを通して国際貢献をしようとする熱意を持った人(日本国籍を持つ者または日本での永住資格を持つ者)

※1. 「ユーラシア大陸」とは、欧州、ロシア、中央アジア、中近東、南アジア、東南アジア、東アジアなどを含むものとする。 ※2. 類似のプログラム・奨学金を二年以内に受けている方については、なるべく多くの方に機会を与えるという観点から、応募を遠慮願うこともある。

募集人員 ①大学院生部門(オーバードクターを含む、常勤職についていないこと):若干名(第一回実績2名,第二回実績3名) ②大学生または社会人一般部門:若干名(第一回実績1名,第二回該当者なし)

助成金額 1名につき50万円(旅費およびそれに伴う調査費・研究費など) ※最初に40万円を支給し、報告書が提出された段階で10万円を支給する。

応募書類

1. 履歴書(市販のものでよい。)
2. 調査・研究プロジェクト計画書:A4版の用紙にワープロで以下の項目(1)~(4)に従って、日本語で作成する(英文は不可)。分量は自由。(1)どの地域紛争に関心を持っているか。(2)具体的に何をやりたいか。(3)それをどのような方法で実現しようとするか。(4)どのような効果・成果が期待できるか。

3. これまでの活動実績・業績などがあれば添付する。

締め切り 2001年5月2日(水) 必着

採用決定日 2001年5月末予定

応募先 〒151-0061 東京都渋谷区初台 2-24-1-205
秋野豊ユーラシア基金事務局 宛

※提出書類は採用の可否にかかわらず返却しません。
問い合わせ Eメールで「秋野豊ユーラシア基金事務局」
広瀬佳一会員宛て。E-mail:yhiro@nda.ac.jp

また秋野豊ユーラシア基金ホームページもご参照下さい。

<http://www.akinoyutaka.org>

《編集委員会からのお知らせ》

編集委員会の新たな体制が以下のように決まりました。
主任 国分良成（慶応義塾大学）

副主任 藤原帰一（東京大学、独立論文担当）

副主任 竹田いさみ（獨協大学、書評担当）

書評委員会 ※3頁を参照して下さい。

さて、学会の機関誌『国際政治』では、ご承知のように毎号特集を組んで編集を行っていますが、それとは別に、特集とは関係のない独立論文を1~2本掲載しています。会員各位からの積極的な投稿をお待ちしています。執筆にあたっては、『国際政治』125号掲載の「編集および執筆要領」にしたがって下さい。ご投稿いただいた原稿は2名のレフェリーの判定により、掲載の可否を決めさせていただきます。

投稿ご希望の方は、国分主任宛にオリジナル1部、藤原副主任宛にコピー3部、竹田副主任宛にコピー1部をお送り下さい。枚数は50枚（400字詰め）以内で、投稿の期限はありません（編集委員会）。

《『国際政治』第129号原稿募集》

『国際政治』第129号（2002年1月刊行予定）の特集論文を前号のニューズレターで募集いたしました。応募がちと少ないので、再度応募を呼びかけます。特集の題目は、「国際政治と文化研究」です。冷戦終結後の今日、グローバリゼーションが進展し、グローバル文化や国際社会の成立が論じられる一方で、世界の国民国家では主流国民によるナショナリズムが強化されはじめ、文化・文明の違いにこだわる動きも生じています。このことは世界各地での地域統合の動きと、それへの反発のなかにも見て取れます。その結果、国民文化の違いや文明の違いが国際関係にどのように影響を与えているのか（与えていないのか）について、改めてじっくり考える必要がでてきたと思われる。

しかし、国際政治研究では文化論的研究や、文化と国際政治の関係についての考察は多くありません。そこで国際関係における文化論的視点や国際政治と文化研究を展開させたいというのが今回の特集の目的です。具体的には、(1) 国際関係における文化論的視点（文化研究的視点を含む）とはどうあるべきかなどに関する方法論的・理論的考察、(2) 文化論的な視点からの国際関係、

あるいは文化と国際政治に関する具体的・実証的考察、

(3) グローバリゼーションのもと多文化・多民族社会化する国民国家とその国際関係の特質についての考察、

(4) 国際紛争を防ぐ手立てとしての国際文化交流の役割に関する考察を中核とする論考を募集します。なお、本特集ではとくに地域を限定しませんが、近年オセアニア関連の特集がないこともあり、同地域の研究をされている方の本特集に沿った論文の投稿を歓迎します。

論文を応募されたい方は、論文の題目と趣旨を600字から800字程度にまとめ、自宅・勤務先の住所、電話番号、ファックス番号、電子メールアドレスを明記の上、2001年2月末日までに関根宛でお送り下さい（早期のお申し込み歓迎）。テーマとの関連を検討した上で、執筆をお願いする方には編集委員会から後にご連絡いたします。論文の最終締め切りは2001年9月末、原稿の長さは注を含めて2万字（400字詰原稿用紙50枚）以内です。

編集責任者：関根政美

住所：〒108-8345 東京都港区三田2丁目15-45

慶応義塾大学法学部関根政美研究室

電話：_____ コム

《国際学術交流基金委員会より》

2001年度の第1回助成申請を受け付けます。

〔申請資格〕 満50歳前後までの正会員で、申請年度を含め継続して2年以上、会費が納入されていること。なお、選考に際しては若手を優先いたします。

〔助成対象〕 原則として申請後1年以内（2002年4月まで）に海外で実施される学会等において研究発表を行う予定の会員。

〔申請期限〕 2001年4月27日（金）

〔申請先〕 日本国際政治学会一橋大学事務局

〒186-8601 国立市中2-1 一橋大学磯野研究館内

〔申請方法〕

・上記事務局宛に80円切手を貼った返信封筒を同封し、申請用紙を申し出て下さい。

・申請用紙に必要事項を記入し、必要書類（プログラム、旅費の見積もりなど）を同封のうえ送付して下さい。

〔決定の通知と助成金の交付〕 2001年6月までに採否を決定し、通知する予定です。助成金は発表原稿を一橋事務局に送付いただいた後に交付されます。

〔その他〕 猪口新体制の下で国際学術交流基金委員会主任は松下洋会員（神戸大学）より、波多野澄雄会員（筑波大学）に交替いたしました。基金に関するお問い合わせ等は、一橋大学事務局を通じてお願いいたします。

《英文雑誌編集委員会から》

英文雑誌が刊行されました。International Relations of the Asia-Pacific で年二回刊行されます。2001年2月に第1巻、第1号ができました。8月に第1巻、第2号が刊行される予定です。この雑誌は一流の著者、一流の論文を求めて工夫と努力を重ねています。第1号の内容は「理事長のあいさつ」にある通りです。第1巻、第2号は「組織的偽善としてのウェストファリア体制とその変容」として1月30日・31日に行った会議の論文を軸に構成する予定です。一巻当たりのページ制限の問題などがあり、変更になるかもしれません。自画自賛になりますが、雑誌の評判は内外ともにおおむね好評です。1月31日のシンポジウムの参加者の先着100名の方には第1巻、第1号のフリー・コピーをあげました。会員に郵送で届くのは2月末か3月初め頃になるでしょう。

この雑誌がアジア国際関係に焦点を当てた学術研究のための地球的なフォーラムにしたいという願望と戦略によって刊行されている学術誌であることはいうまでもありません。この雑誌によって日本国際政治学会がはじめて国際的に認知される、国際的にその評判を高めるよい機会が与えられるといっても過言ではありません。多くの会員の研究は大変高い水準を達成しているわけですが、ともかく日本語で書く限り、その地球的な浸透は大変ゆっくりになり、しかも時にはその存在に気づかれずに終わることも珍しくありません。どの言葉で書かれていても非常に優れた研究（エイ・プラス）は研究仲間によって必ずや世間の目にとまります。しかし、英語で書かれ、一流の学術誌に掲載されておれば、エイ・マイナスでも注目を集めることが出来るようです。

それを実現していくためには多くの工夫と努力が必要です。一番重要なのは会員の参加です。参加にもいろいろ形があり、積極的に投稿していくことが重要です。英語を少し直してほしいという方があれば、ご相談に乗ります。遠慮なく送って下さい。投稿というと、色々批判されるので心理的に嫌だという方も少なくないと思いますが、これも考え方の問題です。原稿をよくしようと、面識のない人までが、親切に、かなりの時間を使って言ってくれるわけですから、本当にありがたいと思つたらよいのです。

次に重要なのは、投稿論文のレフェリーになってほしいのです。匿名評価を4つ集め、編集長がひとつひとつ決定する必要がありますが、レフェリーのコメントがよく考えられた、批判的ではあるが、建設的な評価であればあるほど、改訂の際に役立ちます。レフェリーは地球規模で行っています。レフェリーの要請がありましたら、迅速をお願いします。地球のはてのレフェリーよりも日本のレフェリーの方が平均的にみて、返却するのが

遅いみたいです。慣れればかなり速くできます。レフェリーが投稿論文を掲載するかどうかにも最も強い影響を与える重要な活動です。レフェリーが雑誌の水準を決定するといっても過言ではありません。

第三番目には、会員の方には自動的に郵送されますが、重要なのは大学などの図書館での購入です。知恵を絞って可能な努力をお願いします。どの組織も財政的に困難を感じている今日この頃ですが、とにかく全知全能を振り絞ってお願いします。中央官庁とか地方自治体などの図書館にも試みて下さい。また、国際的なビジネスやシンクタンクにもお願いします。広報の一環として、この雑誌にオープン・アクセスができるようになっています。当面は2001年だけですが、この期間に飛躍的に講読が地球的に増加すれば、雑誌はさらに発展できます。

この雑誌に対するご意見やご要望はいつでも歓迎します。irasia@ioc.u-tokyo.ac.jpにお送り下さい。

最後にひとつだけ、雑誌の編集は匿名評価によって採否を決定する学術誌は膨大な労力を必要とすることを留意していただきたいと思います。そのためのインフラは現在でも非常に不十分です。学会からの編集運営における知的・人的・財政的な参加・貢献の抜本的な向上が必要です。それもこの雑誌を会員が支えているという実感をもてるような投稿やレフェリーなどの参加があってはじめて可能になると思います。お便りをお待ちしています。

この雑誌の発刊を記念して、2001年1月31日にオックスフォード大学出版会、朝日新聞社との共催、大同生命国際文化基金の後援を得て、東京大学山上会館で記念シンポジウムを開催しました。テーマは“The Changing Nature of the State in Asia”（変転するアジアの国家像）、パネリストはStephen Krasner, Steven Smitih, Mehdi Mozaffari, Baogan He, Meredith Woo-Cumings, 李鍾元, 田中明彦, 猪口孝（司会）でした。数多くの会員をはじめ、一般の聴衆が参加し、活発な議論が行われました。概要は、2月5日付けの『朝日新聞』に全面記事として掲載されました。（猪口 孝）

《会計部より》

本年度は、英文ニューズレターに続いて英文雑誌の刊行が始まり、国際的研究活動にさらに1歩前進することとなります。それに向けて、より一層の財源確保にも取り組む必要がありますので、会員の皆様のご協力をよろしく願いいたします。皆様からの会費納入に加え、文部省の科学研究費や国際的な研究費の申請、維持会員の拡大、様々なファンドの要請などを検討しております。ご意見、ご協力を頂ければ幸いに存じます。

（羽場久泥子）

《事務局便り》

○猪口孝理事長のもと新しい事務局が発足しました。構成は田中明彦主任、原田至郎副主任（研究大会担当）、山本和也副主任（ニューズレター担当）です。月・水・金の三日、郷古貴美子さんに事務をお願いしています。連絡先は以下の通りです。電話での御連絡は、なるべく、月・水・金をお願いします。

〒133-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所後門孝研究室気付
事務局

一橋大学事務局は従来どおりです。

○新運営委員会の第1回会合は、2000年11月6日に開催されました。この会合は、第1回ということもあって、猪口新理事長から、今後の学会の運営についての考え方が示され、これについて議論したほか、各委員会の人事をおおむね了承しました。

○第2回運営委員会が、2000年12月8日に開催され、それに引き続き新旧運営委員会の合同会合を行いました。第2回運営委員会では、各委員会からお知らせすべきものの他、以下のような事項が審議されました。

1. 入会申請者13名について審査し、全員の入会を仮承認しました。正式決定は5月の次回理事会です。
2. 2001年5月18日-20日、上総アカデミア・パークで開催予定の大会プログラムを基本的に承認し、企画・研究委員会で具体的作業に入ることが決まりました。分科会の時間帯など若干の調整を行ないましたが、基本的には2000年の大会と同じフォーマットです。
3. 重要な議題として、研究大会の時期の変更について検討しました。年1回となった研究大会で、5月開催をこれまで2回繰り返した後も5月ですが、運営面でいくつか問題が指摘され、秋に時期を変更すべきではないかとの考え方が出され議論しました。

第1の問題点は、執行部の引継ぎ時期と研究大会の時期が秋と春になっていることです。研究大会の企画は、前回の大会が終わった直後に始めるべきなのですが、新しい執行部が秋にできるということになると、前執行部と新執行部の役割分担の調整が必要となり、企画が事実上遅れる可能性があります。

第2の問題点としては、研究大会にあわせて国際交流の企画などを立てたいのですが、そのために科研費などを申請し採択されても、5月大会ということであると、予算が入らないというような問題があります。また、部会、分科会の報告者にとっても夏休みの後に報告の機会があった方が準備がやりやすいという声もありました。さらに大会準備という点からも、新学期の始まった直後の5月よりも秋がやりやすいという声

もありました。

このような議論の結果、運営委員会では、2002年の研究大会から秋に移す方向で検討しており、5月の理事会で審議いただく予定です。ご意見がございましたら、事務局あてにe-mailなどでいただければ幸いです。

4. 学会のインターネット・ウェブサイトを作る方向で検討しています。これについてもご意見をいただければ幸いです。

《編集後記》

新理事会の下で新しいニューズレター委員会が発足しました。2年間、大変丁寧なお仕事を続けてこられた田中敏郎会員のあとを引継ぎましたが、早速戸惑うことばかりです。まず立ち上がりが遅れましたが、今回は運営委員の方々が迅速に原稿を提出して下さったお陰で、何とか年度内に形をつけることができました。

今号は、いわば定番の記事で埋まってしまいましたが、次号以降は、少なくとも1ページを会員の交流に当ててはいかかかと考えています。たとえば、国際政治学のキーワードや研究大会の論題に関する肩の張らない論争とか、会員の研究や著書の紹介、所属研究機関の実情報告、あるいは学会運営に関するアイデアなどです。いずれ運営委員会等におはかりしたうえで、具体的な提案をさせていただきます。会員各位からもご意見をお寄せいただけると幸いです。

なお、副主任に東京大学事務局の山本和也会員、委員には名古屋大学大学院生の井上裕司、三須拓也両会員をお願いしました。

研究大会が年1回となった中で、ニューズレターは理事会や運営委員会と会員、あるいは会員相互を結び血脈として重要性を増していると認識しています。その役割と内容の充実のために、会員の皆様のご協力をお願いいたします。
(主任 佐々木雄太)

「日本国際政治学会ニューズレター No. 92」

(2001年3月15日発行)

発行人 猪口 孝

編集人 佐々木雄太

〒464-8601 名古屋市千種区名古屋大学

大学院法学研究科 佐々木雄太研究室

TEL 03-3260-6177

印刷所 (株)理想社 TEL. 03-3260-6177